

丸山眞男の世界

東京女子大学元学長 隅 谷 三喜男

ただいまご紹介がございましたように、私は東京女子大学の学長を八年間務めました。卒業式ではこの講堂の壇上から、卒業証書をあげたりしましたが、ここでこういう講演をするのは初めてであります。

私の専攻は経済学で、丸山先生は政治学あるいは政治思想史が専門でありますから、専門は違っております。ですから、それほどいつも一緒になることはありませんでした。ただ私が東京大学経済学部におりましたとき、法学部とは隣組でありましたから、そういう意味では、いろいろなお付き合いもなかったわけではありません。

しかしそれよりも、ここにお集まりの方はご存じかどうか知りませんが、丸山先生は東京女子大学の隣人であります。ごく近くにお住まいで、裏門といいますが、そこから出れば三〇秒もあれば行くのではないかと思います。私はこれから、先生という堅苦しいですから、丸山さんというふうに呼びますが、丸山さんは東京女子大学の桜とか草木などを大変愛好されまして、ときどき構内に入ってこられたよう

であります。そういうことについても、私は丸山さんから話を聞いたことがあるのですが、あまり立ち入るのは適当ではありませんので、これ以上のことは申しあげません。

ところで、丸山さんの専門は、さきほど申しましたように、広い意味での政治学、そして政治思想史で、若いときに受けもたれた講座は東洋政治思想史、そういう領域であります。その丸山さんの蔵書を寄贈していただいた。ということになると、みなさんは、政治学の本ばかりかとお考えになるかもしれませんが、しかし、間もなく蔵書目録ができると思いますが、みなさんご覧になったら驚くと思いますが、三万冊と呼ばれた蔵書のうち、私の想像では三分の二は政治学以外のものであります。

そればかりでなく、最後にちょっと申しあげたいと思っているのですが、音楽関係の本がかなりたくさんあります。学識という言葉を私はあまり好きではないのですが、非常に幅の広い知識欲というものを

もって、さまざまな分野における文化というものを研究された。よく本を読まれ、それについてさまざまな感想をもたれた。私はさきほどここへ来る前に、丸山さんの座右に置かれていたような本を拝見しました。みんな他の人の書いた本ですが、そこに非常にたくさん書き込みがあります。ですから、ただ本を読んだというのではなくて、きちんと読まれて、そこに意見を書かれています。これが丸山さんの読書、あるいは思想における非常に大きな特徴だと思えますので、そういう点をめぐって二、三のことを申しあげたいと思います。

丸山さんは大学を卒業し、東京大学法学部政治学科の助手になられ、やがて東洋政治思想史という講座に配置されることになるのですが、師事されたのは南原繁先生であります。この点についても、どう考えたらよいのかと思う点があります。といいますのは、丸山さんはいろいろな文章を書かれましたが、しかし、南原繁の思想とか、あるいはその政治学というものについては、ほとんど書かれたものがないのです。一冊だけです。

南原先生は戦争末期から戦後の頃に、当時は東京帝国大学でありましたが、その法学部長、続いて総長でありました。非常に思想の明確な先生で、クリスチャンでもあります。あらかじめ申しあげてもよいと思うんですが、戦争がはじまったときに丸山さんが南原先生のところに行きまして、いよいよ大変なことが起こりましたねと申しましたところ、南原先生はドイツ、イタリア、日本の枢軸国が勝つたら、世界の文化は終わりだといったというんですね。そういうふうには丸山さん

は、書いておられます。

ですから、そういうナチス的な思想というものに対して、南原先生は非常に激しい反感をもっておられ、それと歩調をあわせる日本に非常に危惧をもっておられた。丸山さんはもちろんその近くにおられて、それは百も承知であった。戦後日本の思想的なリーダーは南原先生ですが、そういうことは丸山さんはよく承知しておられて、南原繁の関連の書物が出たときに、丸山さんはその書物の解説を一冊書いておられると思うのですが、しかしその他には、南原繁を論じたものはないんですね。これをどういうふうに考えたらいいのか。

といって、他の東京大学の先生たち、友人もおり先輩もおるんですが、身近な人のことについて書かれたものがほとんどないのですから、南原先生について書かれていなくても、別におかしいことではないのですが、しかし、根底においては、かなりの影響を受けたであろうというふうには私は思っております。その点については、あとでまた触れたいと思います。

ところで、東洋政治思想史という講座を担当することになりましたが、東洋といっても具体的に丸山さんが勉強されたのは、徳川期の儒教や儒学者についてというべきでしょう。政治学者というのはその時代にはおりませんから、儒教自体が徳川期における日本統治の思想、政治思想であり、儒学者がその担い手であります。そのなかで丸山さんが非常に興味をもたれたのは、荻生徂徠という人物で、徂徠論をいくつか書いておられます。

なぜ徂徠論に興味をもたれ、それにかんりの情熱を注いで研究をされたのか。徳川期の日本は儒教思想を受容して、幕府はそれを指導原理としたわけですが、そのなかでも徂徠は、一般的な言葉でいうと、非常に開明的な儒学者でありました。丸山さんは荻生徂徠のことを、時代を鋭く見、時代を越えてその先を読むことができた儒学者とみて、非常に高く評価されたと私は理解しております。

それからもうひとり、荻生徂徠よりもっと興味をもって、広い意味でのアジアにおける政治思想の対象としてとりあげたのが、初期の福沢諭吉であります。この点はみなさんも、丸山さんについて多少関心をもたれて、その書かれたものに触れてみれば、丸山さんが戦後、福沢諭吉をとりあげて、さまざまな機会に文章を書いたり、共同研究をされておることがわかると思います。どういう意味において、福沢が丸山さんの関心を引いたのかということについては、あとで少し立ち入って申しあげたいと思います。

丸山さんには、自身の本来の著書というものが、そうたくさんあつたわけではないのですが、亡くなられてから座談会の資料とかメモであるとか、そういうものが非常にたくさん出ました。あとでこれを少し利用しますが、丸山眞男『自己内対話』という本が一昨年に出ました。自己内対話というのは、要するにメモであります。いろいろなことについて、そのときそのときに感じたことをメモにした。これはなかなか面白いものですが、こういうものが出た学者というのは、ちょっとほかにはないのではないかと思います。私の先生にも経済学の先

生とかいろいろな先生がおり、その著作物が全集ということ出版される場合がありますが、こういうメモ類をきちんと起こして本にしたものは、丸山さんのケースを除いてないのではないかと思います。

それから、丸山さんの著作のなかに、政治思想家といわれる人の名の前のついた本とか論文も、ほとんどないといつてよいと思います。ですから、政治思想というものを研究のテーマにしたのですが、思想家の論理とか思想家の分析、思想家の伝統というものについて書かれたものはほとんどない。もちろん思想家にはしばしば触れております。触れておりますけれども、その人を客体化してその人の理論を整理して書くとか、その人の生涯を叙述するというようなことはされなかつた。そういう意味では、政治思想史を専門にされていますけれど、一般に思想家といわれる人は、誰がどういったとか、どういう著作があるとか、その思想家のことについて論じますけれども、丸山さんはそういうことをほとんどしていないのです。

ということは、逆に申しますと、丸山さんの視野というものは、そういう特定の人の政治思想とか思想には限定されません。その人を素材にしますけれども、非常に広い視野で問題を整理していく。だからひとりの思想だけでなく、それに対応するいろいろな人物が登場するというのが、丸山さんの書かれたものの非常に大きな特徴であります。その意味でむしろ、民衆の思想にもかなりの関心を持ち、それについても書かれておりますが、この民衆の思想を語る場合でも、丸山さんは他の人とはちょっと違っています。

みなさんが一番手っ取り早く手にできるのは、岩波新書にあります『日本の思想』です。この本のタイトルからもわかりますように、日本の思想、日本人のもっていた思想がどういうものであるのか、しかもそれをただ客観的に、たとえば思想家といわれるような人がどんな思想をもっていたのかとか、その書かれたものを対象にして分析するというようなことはしないのです。そうではなくて、本当に民衆がどういう思想をもったのかということをも丹念に分析されるわけです。

ですから、ある時代にはある思想が出てきますが、その背後にある社会がどういう構造をもっているのか、またそうしたなかで思想家という人たちが、あるいは知識人という人たちがどのような発想や思考の様式をもっていたのか、こういうことが丸山さんの非常に大きな関心事であり、それこそが本来思想というものを研究する者の視点だと考えていたといつてよいと思います。

それゆえ丸山さんの著作のなかに、政治思想家といわれるような人が出てくるのはごくわずかです。たとえば文学は、ある社会において作者が感じとり、受け止め、多少理論化したその社会や時代の姿を小説として書くわけですから、丸山さんは、そこに表われてくる日本人の思想というものは何であるのかということを論じる。またそれだけではなくて、『日本の思想』のなかには音楽の話も出てきます。ですから、日本人の理性的なものごとを考える側面を考察すると同時に、それを越えて、日本人の感性的なものをも対象にして日本の思想を考察するというのが、丸山さんの思想観といえます。

私は、丸山さんの場合には、「思想」という言葉はあまりよくないと思っております。だいたい何かの思想というとき、丸山さんはいつもかなり批判的であります。そういう意味では、丸山さんが関心をもち、そのなかから何かを吸い取り、自らの学の体系というものを豊かにしていった世界というのは、非常に広さと厚みをもっているということです。

東京女子大学が、その丸山さんの蔵書や著作の背後にあつたいろいろなノート、文献等をいただくということは、ですからよく考えてみる必要がある。というのは、いわゆる政治学者、あるいは経済学者でもないのですが、ともかく一生懸命に勉強をした人たちが、そして政治学なら政治学についての著書がたくさんある、経済学にしても著書がたくさんある、それらを書くための参考文献類というものが非常に豊かにある、そういうものを東京女子大学がいただく。残念ながら東京女子大学には、政治学科とか政治学コースというものは今でもないとはいえますが、そういう東京女子大学が、丸山さんという政治学のいわば権威者の蔵書をいただくということに、どういう意味があるのか。

いうならばそれは、丸山さんの政治に対する考察の幅が広いということ、そして厚みがあるということです。そのことは具体的に申し上げますと、丸山さんの場合には政治思想という講座名になっておりますが、思想という体系ではなくて、丸山さんはその言葉をそう使っていないのですが、私たちが受け止めるときは思索、考えるということ、動詞でいえば思索するでもいいのですが、思考する、考える、そういう思

索のための書というものを寄贈していただいたというように、私は考えます。

残念ながら今日の大学、あるいは大学院でさえも、出来上がった思想というものを学ぶ。これはよくいえば豊かでありますが、やや批判的にいえば、非常に大量のすでに先輩たちが作り上げた理論なり成果なりが客観的にあるわけで、それを学ぶというのが、大学で学ぶということであります。しかし、丸山さんの場合には、出来上がった思想を勉強し、それを受け止めて、Aの人とBの人、あるいはCの人もあわせてもう少し新しい発想ができないかとか、そういうもので自分の体系を作るといようなことはなされない。ひとつひとつの本を丹念に読んで、考えながら読む、思索する。

これは今の大学生諸君に、どうか頭の片隅か、あるいは真ん中でもいいですけど、置いておいていただきたいことです。学ぶということとは、けっしてただ出来上がった学の遺産を理解するということであってはならない。もちろん遺産も理解しなければいけません。受け止めるなければいけませんけれども、われわれに課せられたもうひとつの根本的な問題は、それを材料にしながらどう考えていくかということ、思索するということが決定的で、そのことは丸山さんの書かれたものを見ると非常に歴然としております。いつも考えているんです。本を読みながら考えている。

ですから、さきほど私が申しましたが、図書館の丸山さんの蔵書はみなさんにはすぐには見せられないというお話ですけれども、今回の

資料展示はご覧になれる。その展示してある図書を見るとその欄外に、上とか横の方にいろいろと書き込みがあります。書き込みがあるということは、読みながら考えた。これはおかしいとか、これはなかなかいいことをいっておるとか、丸山さんはそういうふうな考えながら本を読んでいるんです。

丸山さんの書かれた著作とか論文というものは、そういう意味では、みんなその思考のなから、あるいは思索のなから出てきた作品であります。いわゆる学者が書いた、いろいろな人の説を紹介して、このなかでこの人の説がかなり妥当ではないかとか、そういうようなことを学び選択することではなく、自らの頭のなかにおいてこれを思索していったという点に、丸山さんの業績というものがあるといってよいと思います。

そこで、丸山さんがかなり口を極めて批判し、強調しているのは、「開かれた思想」「開かれた精神」と「開かれている思想」「開かれている精神」とは、本質的に違うのだということです。「開かれた思想」というのは、モダンな新しいものを受け止めて、伝統的なもの、閉鎖的なものから自らを開いて、先駆者たちのものを受け止めて、自分の思想とする。そういう人は、たとえば明治という新しい時代のなかで何人も出てくる。しかし、「開かれた思想」が本当の思想としての活力をもつかというと、彼はそれについては非常に否定的です。そうではなくて、「開かれている思想」でなければいけない。

ある新しい理論を自分が身につけて、そして他人と議論をする。こ

これは、「開かれた思想」です。ところが、丸山さんのというのは「開かれている思想」、いつも「開かれている」ということ。ですから他人の説も聞き、自分の説もそういう「開かれているもの」として批判を受け、それにより改めながら対話が成立していく、そういう思想でなければ駄目だということを、繰り返し述べております。このことは、丸山理論というのはあまりよくないのですが、丸山さんの体系というものを考える場合に、決定的な要素であると思います。

それゆえ戦後に丸山さんは、戦前までの思想をかなり厳しく批判しますけれども、批判してそこで閉じてしまうのではなく、他の思想も受け入れながら多くの人々に影響を与え、また影響を与えると同時に前進をしていくということを課題としていたわけです。そういう意味で、福沢諭吉という人に対して、丸山さんはかなり好意をもって、晩年とくに福沢諭吉研究会のようなものを作られて、福沢に関する本を作られたりしました。

福沢をどうして評価したかという点、福沢が「開かれている思想」をもっていたからなんです。福沢は幕末にイギリスなどの外国にでかけ、外の文化を受け入れるのですが、そこで閉じてしまうといえますか、閉じられた新しい思想をもって人を説得するということではなくて、思想的に開かれていて、新しいものに対して非常に弾力的に対応していく。新しい状況が生まれれば、その状況のなかで、それをどのように入れ替えるかという社会のなかで活用していくことができるのかということを考えている。そういう意味で、福沢という人は、非常に

開明的で、しかしそれはけっして新しい思想を受け入れて閉じてしまった思想ではなくて、いつも「開かれている思想家」である。そこで明治初期にいろいろと問題が起こったときに、福沢諭吉がどういうふうに対応して、どう思想を展開したのかということに対して、非常に興味をもったわけです。

私は個人的にいますと、福沢諭吉という人はあまり好きではありません。彼を嫌いになった理由のひとつは、キリスト教徒に対して非常に批判的です。ときおり少し好意的なことはいいますが、基本的には批判的です。どうしてこんなところに引っかかるかと思うようなところに非常に引っかかりますが、今日はそのことには立ち入りません。ただ丸山さんが福沢を非常に高く評価したということにどうして置きます。

もうひとつ丸山さんの思想のなかで大きな特徴なのは、精神と社会、あるいは主体と客体というものについて、非常に関心をもっていたことです。自然科学を含めて近代科学というのは、客観的な世界であります。今日の科学者も、科学という客観的な世界の構造というものを一生懸命に、物理学者は物理的な関係を、化学者は化学的なものを、生物学者は生態的なものを、それぞれ客体化しながら研究します。そのこと自体は、それによって学問が発達してきたことに間違いはないのです。

社会についても、社会を客観化して、たとえば社会というものはこういうものである、ここに社会の基本的な問題があると考えて、それ

を打ち壊していかなければ新しい社会はこないと考える。そういう思想の典型は、マルクス主義であります。丸山さんとマルクス主義との出会いというのは、これはひとつの大きな出会いなので、あとで少し申しあげたいと思いますが、いずれにせよそうした主体と客体ということに、丸山さんは非常に興味をもっていた。

丸山さんという人は、哲学にもかなりの興味をもちましたが、どうしてかカントをあまり好きではなかった。カントという言葉は、丸山さんの本のなかにほとんど出てこない。ヘーゲルは、少し出てきます。けれども一番出てくるのは、デカルトであります。デカルトというのは、近世哲学の開祖と呼ばれている人です。そのデカルトに対して非常に関心をもっているのは、デカルトの場合には、主体と客体という二つの存在を定置して、その関係を追求していく。しかし、少しでも哲学を勉強されたならば、デカルトという人がどういう人だったのかわかると思います。そのうち主体のほうに中心が置かれて、客体のほうの影が薄くなる。ですから主体を中心とした哲学といわれることになるわけですが、丸山さんはデカルトが主体と客体というものを二つの要素としてとりあげたということに、非常な関心をもっているんです。

その主体というのは、思想的な問題を当然課題とする。客体のほうは社会とか、われわれをとりまく自然もそうです。そういう客体とそういうものがあり、そのなかでいろいろな葛藤があり、調和があり、われわれの生というものがある。こういうことに対して思想の体系は、

社会科学たとえば政治学なら政治学をやる場合も、基本的な像とみていいのではないかとふうに、丸山さんは考えたんでしょう。

ですから、デカルトに対して非常な関心をもち、彼がその後の哲学の思想のなかでどう受け止められながら展開したかいろいろと論じられるわけですが、そのなかで社会科学というものはもちろん客観的な存在についての分析をする。けれども丸山さんの場合は、その客体に接近していく主体というものをいつも問題にしているんです。

マルクス主義あるいは共産主義というものに対して、丸山さんはある距離をもちます。距離をもつのは、共産主義運動のなかでは客体的な存在がすべてを支配して、主体はそれを受動的に受け止めるだけです。受け止めてそれにどう反応するのかを、われわれは問われる。だから主義をもった人間として闘争することになっていく。けれどもその一番の基底は、あくまでも客体であるというのがマルクス主義、とりわけ共産主義というものの体系ではないかと、丸山さんは考えている。

ここでひとこと申しておきますと、丸山世代といいますが、一九三〇年代に青年期を送った人たちは、旧制の高等学校で自分の生き方を考え、世界と社会を考え、本を読み、大学に行って自分はどこに進もうかということも考える。それで丸山さんはやはり、マルクス主義にかなりの関心をもった。そのことはあとになって、あまり書かれませんが、書かれませんが、私の想像するところ、やはりかなりの関心をもった。マルクスをかなり高く評価しています。

それでたまたま高等学校の二年生のときでしょうか、幼時から親しい長谷川如是閑が出る講演会に行つて、警察に一網打尽で捕まり、警察に泊められる。それは、丸山さんには非常に大きなショックであつたようです。そしてマルクス主義というものにどう対応すべきであるのか。これは、かなり大きな課題として残つたと思うんです。そういうなかから丸山さんは、共産主義が客体として圧倒的に人間を支配するということ、その支配の論理というものをみつけた。それにもかかわらず、その支配の体系がもっている問題性、それを丸山さんは問題と思つていたわけですが、そのゆえに闘う、革命を起こすということに対して、丸山さんは必ずしも納得できなかった。マルクス思想のもっている限界というものに、突き当たらざるを得なかつた。そこで、そういうものを越えて思索していくことになつていったと、私は理解しております。

そういう意味では、社会に対する精神的な主体というものをどのようにに設定していくのか、その主体というものを構成する自分の思考の体系というものをどのようにに築いていくのかということが、政治学を勉強しながら丸山さんがずっと考え続けた問題であらうと思います。

そこでひとつ、大学闘争に多少踏み込まなければならぬのですが、大学闘争に対して丸山さんは、かなり鋭い批判をしました。批判をする前に、丸山教授の思想を弾劾せよというわけで、何回か学生たちに講義のときなどに取り囲まれていろいろと攻撃をされ、ひとり閉じ込められるようなことになつたりするわけです。私などもそういう体験

をしました。丸山さんのことをいいながら、私のことをいうのはおかしいですけど、私も大学紛争のときに、丸山さんがやられたと同じような状況に置かれかねなかつたんです。

それは、安田講堂という東大の講堂の前に大きな立て看板が立ち、授業時間表が出るんですが、そこへ学生たちが押しかけて、その先生を糾弾するというわけです。それは、その学部の学生だけでなくて、共闘会議というものがあつて、そうした勇ましい学生たちが押しかける。丸山さんのところにも何回も押しかけたんです。

私の話をするとちよつと脱線ですが、私も木曜日の二時限、そのときはたぶん工業経済論という講義をしていたと思いますが、それが授業表に書いてあり、そこにみんな集まれというわけです。私は、ああ今日はやられるのかと思つて参りましたら、学生が現われぬ。そこで翌日に、そういう勇ましい学生をつかまえましたから、昨日押しかけるといういなながら、なぜ押しかけなかつたのかといひましたならば、前の晩にわれわれは隅谷理論の勉強会をした。これはいつもそうです。丸山さんのところに行くときには、丸山理論の研究会を、前の晩にみんな集まって喧々諤諤大議論をするんです。そこで、こここのところを追及せよとかなるんです。

それで隅谷理論の研究会をやつただけで、最後のところで隅谷はクリスチャンだということになり、クリスチャンをどういうふうに攻撃するのか、キリスト教のことを自分たちはわからないのであきらめた、こういうのです。丸山理論のほうは政治とか社会の思想です

から、これは彼らなりに議論して、ここを追及せよということになった、丸山さんはそのときに、学生大衆、大衆の思想というものに対して非常に嫌悪感をもったんです。

ある理論の体系というものを、一生懸命構築しようとするのはいいけれども、それがすべてであると考えたとき思想は終わりである。もうそこで終わり。そういうものでは研究、あるいは学というものは成り立たないんだと。思索していれば、その思索のなかで第三者がいろいろなことをいう、それも取り入れて考え、思索の体系によって思想は前進する。けれども全学連の思想体系をみると、思索がない。できあがった理論で攻撃するだけである。これでは学問は終わりであるというように、考えられたようであります。そういうふうには丸山さんは、全学連に対してかなり批判的なことをいっておられる。

しかし、私は丸山さんの本を読んでいて、この『自己内対話』という本には非常に面白いというか、非常に深刻な問題が出てきます。「一九六九年四月一八日、日赤病床にて」というところに、全学連にやられたあと健康の状況が悪くなられたんですが、そこでこういう和歌を作られています。「夜半にふと目覚むればいま見し夢は東大紛争のほかにはあらず」。夢をみれば、全部東大紛争だというわけです。なかなか深刻です。

東京女子大学の学生諸君も当時は先生をつかまえて、丸山先生ではなくて女子大の先生をつかまえて、だいぶやっただんですけれども、その先生たちが夢をみたら女子大の学生だったかどうかはわかりません

が、「東大紛争のほかにはあらず」、学生たちがわあわあいう夢をみたというんですね。私は神経が鈍いせいとか、そういう夢はぜんぜんみなかったものですから、ああ大変だったんだろうなあ、私より丸山先生のほうがセンスが非常に敏感というか、そういう問題を私よりもずっと真面目に考えていたんだろうということを、こういう和歌などを読みながら、非常に痛感いたしました。

いずれにせよ、丸山さんの場合には、思想というよりは思考というものの方に、あるいは思索ということに非常な力点があるわけです。ですから、思索を閉鎖してしまったマルクス理論で攻撃するということは、学の場合においては取るに足らない。こう考えられたと思います。最後に、もうひとつ申しあげたいことがあります。今までいってきた思想にしろ思索にしろ、これは理性的なものです。理性の世界です。今日、学の体系というのは、自然科学であっても、社会科学であっても、だいたい理性的な体系です。最近では人文科学のような、たとえば心理学などでも、人間に関することはみんなこれを客体化して、理性的に分析していく。これが今日の科学の世界で、大学もそういう世界であります。

ところが、丸山さんの本を読んで非常に感ずることは、そういう理性だけでなく、感性というものをもっているということです。そこで、これは生きた言葉だと感じる。そういう感性を、丸山さんという人は非常によくもった人だと思えます。

それが、非常に感性そのもののかたちをとって表われてくるのが、

丸山さんの音楽に対する関心です。非常に膨大なレコードと音譜をもっているんですね。そういう音譜類もすでにいただいて、女子大が蔵書の一部としてもっております。それは実にさまざまで、しかもひとりひとりの作曲家や指揮者に対して、それぞれの批判を書いておられるんです。ですから、そういう意味では、理性の世界だけでなく、感性の世界というものを非常によく受け止めて、理性の世界のなかにも、一般の学者よりも感性的なものが入っている。

したがってそこには、思想となれば理性の体系ですが、しかしその思索のなかに単に理性だけでなく、感性的な要因も含まれる可能性をもっているわけです。丸山さんはそういう意味で、感性の世界というものを非常によく受け止めている。私は音楽の専門家でも、非常に深い興味をもっているわけでもなく、とても丸山さんとは比べものにならないのですが、ベートーヴェンの曲はどういう特質をもっているのか、それに対してバッハはどうかとか、そういうことを実によく練り返し、論文的なものというよりもむしろこういう『自己内対話』のようなもののなかに、かなりよく書いております。

今日は時間ありませんから、そういうことには立ち入って触れませんけれども、この『自己内対話』は少し読みにくいところはありますが、よく読めばなかなか面白いことがたくさん書いてあります。丸山さんがその時々感じたことをメモにして書いているんです。ですから、非常に理性的な点もありますけれど、非常に感性的な表現になっているところもあるんです。そういうところが、丸山先生という

学者の基本的な特質です。

われわれの社会的な生活のある姿を、どのように作曲家たちは彼らなりに感性的に受け止めて、それを音譜として展開しようとしたのかというようなことも、丸山さんは一生懸命に書いております。私などは、ベートーヴェンならベートーヴェンの曲を一曲くらい聞いて、あこれはなかなかいいなと思うくらいですけれども、丸山さんは実に丹念にそういう問題を考えておる。そういう意味では、音楽のもっている感性的な傾斜、どういふ点に強調点があつて、どういふ点を受け身で受けとっているのかという点は、素人の音楽評論ではけつしてない。玄人です。

そういう感性というものを十分に身につけて、学問の世界に接近していく。したがって、それはいわゆる「冷たい論理」ではなくて、そこに非常な暖かさをこめた社会現象あるいはそこにおける人々の動きをみていこうとする姿が、非常に顕著に示されているわけです。

こういうことは、もうちょっと立ち入って、一緒に本でも読みながら議論をすると非常に面白いのではないかと、面白いといつては失礼かも知れませんが、得るところが多いのではないかと思います。私は今日、そういうもののいわばイントロダクションをみなさんにお話して、丸山眞男という人の包括力、その幅の広さと厚みをみなさんが受け止めていただければと思います。

そういう意味で、私たちのこの図書館が丸山文庫というものをもつたということは、けつして狭い意味での政治学あるいは政治思想に関

する膨大な蔵書なり何なりをいただいたということにとどまるものではない。むしろ文科系のみなさんでも、あるいは理科系の人でも、丸山さんの本を読むことによって、さまざまな点において新しい世界に直面するという、そういう躍動する論理というようなものにぶつかると、それが丸山さんの非常にすぐれたところだ。

最後にひとこと申しあげて、私の話をおしまいにしたいんですが、私などは東京大学におりました、いろいろ立派な経済学者やもろもろの学者と交わりをもってきました。この一五、六年は日本学士院というところにおりました、丸山先生も日本学士院会員でありまして、私も時々そこで言葉を交わしたことがあるんですが、そこでの偉い先生たちが、それぞれの業績を残して亡くなられます。みんなだいたい年をとっておられますから、亡くなられる。

そうすると、その全集というようなものが出たり、存命のときから全集の出ている方もおりますけれど、しかし、亡くなってしまっただけから、その先生をめぐってこういうものがある、ああいうものがある、この本は『自己内対話』です、今日はここにもってきませんでした。この本は『丸山眞男対談集』とか、一〇冊、一五冊というようなものが何種類も、丸山さんの場合には出てくる。こういう現象は、他の大先生についてはありませんでした。ということは、丸山眞男という人が、非常に幅の広さとともに深さをもっていたというこのことの反映であろうと、私は思っております。

その人が語ったこと、その人が非常に短い文章で何かをいったこと、

そのことのもっている思考の世界、考える世界というものがそこから浮かび出てくる。そういう意味で、できあがった著作というものでないものが非常にたくさん、それこそ全集的な姿やあるいは単行本的なものとして出てきております。三年たつても、まだ読み継がれております。こういうことは、ほとんどないケースであります。

ですから、そういう丸山さんの蔵書とその他の資料を東京女子大学がいただいたということは、非常に特殊な、ただある有名な学者の蔵書をいただいたのとはちよつと違った意味をもっている。それで見なさんも、それに触れることによって何らかの刺激を受ける。そういう刺激をもっているものを、私たちは丸山さんからいただいたということに対して、大いに感謝すべきではないかと思うのであります。

今日は、第一回の丸山記念講演会です。ですから丸山さんのもっている幅と深さについてお話ししました。第二回はどなたかわかりませんが、それぞれ何かの領域で、私などよりもっと深い話をされるでしょうけれど、今日はイントロダクションとして、丸山眞男の世界というものをみなさんにお話したいと思った次第であります。以上をもって、私の話を終わらせていただきます。

(司会・大隅和雄) 丸山眞男の世界の幅の広さと厚さの深みについて、大変興味深いお話をいただくことができました。厚くお礼申しあげます。東京女子大学は丸山先生のご本をいただくことになりました、丸山眞男文庫準備委員会という委員会を作りました。私はそれに所属し

しておりますが、三万冊の図書というのは、大変な数です。それを広くない東京女子大学の図書館のどこに置くことにするのか、今後の管理はどうするのかなどを相談してまいりました。丸山先生の門下の方々のご協力も得て、現在いろいろな作業を進めております。

今日の隅谷先生のお話をお聴きになって、なるほどそうか、それではさっそく丸山先生のご本をみたいものだ、みなさんお思いだと思います。図書館のほうにも、そういう問い合わせがつきつぎに來ておりますが、私も日本中世史を専攻しております、手書きの古文書などの調査をしたり、目録を作ったりする仕事を長年続けておりますが、丸山先生のご本のなかには、今もお話がありましたように、たくさん書き込みがあったり、さまざまな形の傍線が引かれていたりします。したがって、ご本をいただいて管理をするほうにしますと、新しい線を引かれたら困るとか、読んだ方がまた書き込みを加えられたら混乱が起るのではないかというような心配が、つきつぎに起こってまいります。

そこで、みていただく前に、できるだけ正確な詳しい調査をしたいと考えております。なかなか手間隙のかかる仕事です。今は数年かけて仮目録を作り、それを奥様に差しあげるようにしたいと思っております。しかし、全体の調査が終わるのに、やはり一〇年はかかるのではないかと思っております。

丸山先生は、自分の本には特別骨董的価値のあるような本はないのであるから、できるだけたくさんの方のお役に立ててほしいというの

が遺志だったわけで、図書館としても是非そうしたいと思って鋭意努力はしておりますが、なかなか時間のかかる仕事です。整理のついでに分からできるだけ早く、一般の方にもみていただくようにして、先生のご遺志を生かしたいと思っておりますが、そういう状態です。ですので、一生懸命努力はしておりますが、よろしくご理解、ご協力をお願いしたいと思います。今日は本当にたくさんの方にお出かけ下さいまして感謝しております。どうもありがとうございます。

(文責 黒沢文貴)